

松本先生の理論に納得。「自分の免疫で治す、
これ以上の医療はありません」

「潰瘍性大腸炎 私にとって意味のある再発」

匿名希望（郭 智華）34 歳

2015 年 10 月 31 日

〈発症〉

私が潰瘍性大腸炎を発症したのは、高校2年の秋頃でした。中学2年の時、阪神淡路大震災があり、兵庫県神戸市に住んでいた私の家は全壊しました。そして、車の中で過ごしたり、親戚の家に行ったり、仮設住宅に入ったりの生活をしました。高校2年の頃、父の友人たちの助けもあり、元住んでいたのと同じ場所に、3年がかりでようやく家が完成しました。今思うと、私の潰瘍性大腸炎は学業やクラブ活動、アルバイトが忙しい中、落ち着ける家ができて、やっとホッとできる環境になったことにより、発症したのだと思います。

それまでは病院など行ったこともなく、日常で薬なども全く飲んだことがないくらい病気とは無縁でした。でもその時は、「これは病院に行かなくてはいけない」と思いましたし、下痢から血便になった時、自分でもとても恐怖を覚えました。食べるとすぐにトイレに行くというような状態で、食べることも怖くなり、何も食べられなくなっていました。

最初の病院を受診しましたが、そこでは検査ができないとのことで、次の病院を紹介され、そこで潰瘍性大腸炎と診断されました。そして、手術を勧められましたが、父母は「それは絶対避けたい」と言い、次の病院へ行きました。しかし、そこでも手術を勧められ、父母が「とにかく手術ではない方法で」とお願いしたため、主治医の先生は、「薬で治療して、それでも治らない場合は手術にしましょう」と言ってくださいました。

それから、1ヶ月の絶食、24時間の点滴、薬はサラゾピリンとプレドニンでした。どれくらいの量を飲んでいたら、記憶があいまいですが、はじめは、どちらの薬も10錠以上飲んでいました。薬の量は少しずつ減っていきましたが、今考えると恐ろしいことです。ステロイドを毎日10錠以上も飲んでいたのでから……。とにかく、「手術をしなくてもいい」と言われるくらい症状はよくなり、2ヶ月ほどで退院し、それからは通院治療になりました。

その後、2年ほど通院しましたが、その間も、少ないながら、ずっとプレド

ニンが処方されていきました。その間は再燃がなく、日常生活も普通に送れていました。病気になったことも、「どうして私が？」と思っていたこともありましたが、「それまで病気とは無縁だったけど、これで病気の人のがんがわかるようになった」とか、「なかなかできない経験だから、これは私に与えられたもので、プラスに変えていかなければならない」と思ったのを覚えています。

〈母の死〉

高校3年の冬頃、母が乳がんになり、余命3ヶ月を宣告されました。手術の他、色々な方法を試しましたが、18歳の頃に母は他界してしまいました。私と母は、本当に仲がよく、私は母が大好きでした。毎日のように、母を職場まで迎えに行き、一緒に帰ったりしていましたが、18歳になってもまだまだ甘えん坊でした。ですから、そんな母の他界は、私の人生を大きく変えてしまいました。それからの私は、何をしても、幸せを感じることができず、心の底から笑うことができなくなってしまいました。全ての景色は違ってしまい、他の人が変わらない日常を過ごしていることが信じられない気持ちで、「もう自分はこれから生きていても大好きな母がいないのだから、何の意味もない、死にたい」、毎日そんなことを思いました。母に会えるなら、死ぬことが恐怖ではありませんでした。でも、小さい頃から、母に「人間には絶対してはいけないことがある、それは自分で自分の命を絶つこと」と教えられていたので、それをすると、死んでも母に会えないような気がしてできませんでした。

それから数年、私は上辺だけ普通に何事もなかったように振舞っていましたが、実際は心のないロボットのような人間でした。体の真ん中に大きな穴が空いているようで、何をしてもその穴は埋まらず、喜怒哀楽もそれほどなく、仕方なく生きているという感じでした。

しかし、色々な本を読んだり、色々な人に助けられたりして、徐々に気持ちに変化が起きました。「1度死んだつもりになってみよう」と思いました。「母と一緒に私は死んだ。今はおまけのような残りの人生をいただいている。だから、何か人の役に立つことをしなければいけない」、と思ったのです。

それから、必死に働き、援助もしてもらい、心理学を学ぶため専門学校に入りました。そこでも学びや出会いがたくさんありました。それから、就職し、母の死から5～6年が過ぎた頃、ようやく、少しずつ、前向きに生きられるようになってきました。母のことを冷静に話せるようになるまで、10年ほど時間がかかりました。今思うと、母の死から数年間、私は「強くならなければいけない、心配させてはいけない、人に元気だよ、大丈夫だよと思ってもらわなければいけない」と、ものすごく気を張っていたと思います。鎧をまとっていました。その頃を知る親戚は今も、あの頃のあなたは触ると壊れるのではないかと思うくらい張り詰めていたと言います。おそらく、自分でステロイドを飲んでいるのと同じ状態にしていたように思います。

〈再発〉

それから、結婚を機に仕事をやめて、翌年には第一子を出産しました。それから2年後、第二子を出産しました。そして、去年の6月、血便に気づき、総合病院で検査してもらいました。結果、範囲はすごく小さいけれど、潰瘍性大腸炎が再発しているとのことでした。ペンサタを4週間分処方されて出血が収まったので、先生に「薬はもう飲みたくない」と伝えると、「潰瘍性大腸炎の患者さんは何もなくても飲んでる人が多いですけどね〜」と言われましたが、とりあえず薬をやめさせてくれました。

それから、1年は何もなく過ごしましたが、今年の6月にまた血便に気づきました。病院には行かず、残っているペンサタで、とりあえず血便は止まりました。7月にも血便があり、だんだん頻繁に血便に気づくようになりました。その頃、私は保育士の資格をとるために育児のかたわら勉強していました。出産による免疫低下とストレスから、発症につながったのだと思います。このまま病院に行っても、薬をもらって、飲み続けなければいけない、年に一回の検査など、先は見えていました。「子どもの為にも元気なお母さんでありたい、このまま病院に行ったら、薬漬けになるだけ、それは絶対に嫌だから何とかしなければ」と、その頃からネットで潰瘍性大腸炎を調べました。

〈松本医院へ〉

ようやく松本医院のホームページに辿りつきました。夜中でしたが、眠れずに、必死に読みあさりました。難しい言葉もたくさんありましたが、他のどの専門と書かれているような病院のホームページの内容よりも、ストンと私の中に入ってきて、腑に落ちる感覚でした。まだ診てもらってもいないのに、治った気分というか、治るんだという強い安堵感がありました。

「自分の免疫で治す、これ以上の医療はない」と思いました。松本医院に行くまでに、毎日とにかく手記を読んだり、先生の理論を読んだりしました。初めて行った日には、とても緊張しましたが、先生は、「自分の免疫で治すんやで！」と暖かく握手して下さいました。

帰って早速 漢方薬を煎じました。最初はとても飲めるものではありませんでしたが、皆さん手記に書いておられるように、3日もすれば、慣れてしまいました。

リバウンドはすぐに始まりました。夜中も下痢で目を覚ましました。しばらくして収まり、次は肩こりが起こりました。ヘルペスの薬で肩こりは収まりましたが、再び下痢が始まりました。その事を先生に伝えると漢方を変えて頂き、下痢は止まりました。また、血液検査の結果から、貧血もひどかったのも、貧血のお薬も飲みました。次に、足のスネや後頭部にアトピーが出て、顔にも痒みのある湿疹が出ましたので、塗り薬を処方して頂き、塗ると痒みがおさまりました。

現在は貧血も改善され、顔の痒みが少しある程度になり、漢方は食後の1種類になりました。下痢も血便もなく順調に思います。今回の再発は、松本医院に行くまで、私をとっても不安にさせました。このまま再発を繰り返していると、入院とか手術になる日がくるのではないか、それでは子ども達を不安にさせてしまうという心配もありました。ですが、今では今回の再発が、自分の体を見直すとてもいい機会だったように思っています。漢方を飲んだり、鍼をして頂いたり、お灸をしたりすることは毎日の楽しみの時間になりました。

私が高校生の頃の状態は、入院を余儀なくされるほどに酷い状態でしたが、今回は症状が出たり出なかったりの状態で、受診に至りました。

もし「今、自分の状態はそんなにひどくないから大丈夫」と思っておられる方は、“今”受診して頂きたいです。それが、早い治癒への一歩です。

〈心の在り方〉

先生はいつも、「何より穏やかにストレスをためないこと、心の在り方をよく見直すことが大切だ」とおっしゃいます。自分にストレスやイライラがある時、同じ空間にいる家族や大切な人にも、ストレスがあるかもしれません。自分が相手に何かを望む時、相手も自分に何かを望んでいるかもしれません。感謝の気持ちも同じく、まずは自分が感謝することが大切な気がします。相手にばかり過度に期待するのではなく、自分を振り返ることから始めなければいけないのかもしれません。「心穏やかに、いつも少しのゆとりを持って、日常を優しく過ごせたらいいな」と思います。人間なので、こう思っているけど、できる日とできない日がありますが、それが日々訓練というか、練習なんですかね。

〈これから〉

今は3歳と1歳の子どもがおりますが、今までは風邪をひいた時や、鼻水、せきが出ただけの時でも、迷うことなく、耳鼻科や小児科にかかっていました。私は、子どもが病気の時、それはそれはメンタルが弱くなって過剰に心配していました。「早く病院に行かないといけない」と思い、連れていってもなかなか治らないとストレスがありました。でも、松本医院に出会ってからは、せきがひどい時は、ハチミツ大根を飲ませたり、温めたりし、鼻水については家でよく鼻吸いをするなど、薬に頼らない方法を模索するようになりました。熱が出ると焦っていましたが、今は「免疫が上がって闘っているんだな」と、落ち着いて様子を見ることができるようになってきました。

松本医院に出会わなければ、これからも闇雲に薬を飲ませて、アレルギーやら、ゆくゆくは私のような病気にさせてしまっていたかもしれません。まだまだ勉強不足ですが、これからも、先生の理論や皆様の手記を読んで勉強させて頂きます。この出会いに本当に感謝しています。先生はじめ、看護師さん、鍼灸師さん、スタッフの皆様、これからも完治に向けてお世話になります、よろしくお願い致します。